

大学出版

The Association of
Japanese University Presses

No.135

2023.8

夏

『特集』大学の現在地

大学淘汰の時代がやってきた 伊藤史彦 1

学問の自由から考える大学ガバナンス

— 近年の大学ガバナンス改革論の問題点 佐藤岩夫 6

世界の中の日本の大学

— 国際化の課題と展望 杉村美紀 11

失われた一〇年？

— 私の東大国際交流記 葛西康徳 16

『連載』何年経っても忘れられない、編集者の一冊『10』

大西公平著

『リアル』を掴む！— 力を感じ、感触を伝える

ハプティクスが人を幸せにする』 吉田拓歩 表2

大学出版部ニュース 22

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク



一般社団法人
大学出版部協会

大西公平著

『「リアル」を掴む!——力を感じ、感触を伝えるハプティクスが人を幸せにする』

吉田拓歩（東京電機大学出版局）



一般的な「筋電義手」は力に対する反応が返ってこないため、柔らかいものを強く握って壊してしまいうこともあるそうだ。こうした問題をすでに体験している義手利用者は、人と握手したり、赤ちゃんを抱いたりする際に躊躇してしまいうらしい。「ハプティクス義手」は柔らかいものも把持可能だ。装丁では、それを表現するため、ロボットハンドと子どもが握手する写真を使うことにした。万が一の事態も鑑み、手の出演者の選定に悩んだ結果、当時5歳の我が子を口説いた。[東京電機大学出版局・2017年／四六判・184頁・定価1760円]

「吉田さん、小難しいお話は後にして、こちらにどうぞ」。ある研究会にお邪魔していた私に、大西公平先生が声をかけてくださった。通された場所は、さまざまな機器材が所狭しと置かれた研究室だった。「これが、世界で初めて高精度の力触覚伝送（ハプティクス）を実現した装置です」。今から、「力触覚」を伝えるデモを体験させてくれるという。「では、日吉にあるポテトチップスの感触を、ここ（新川崎）で感じてもらいましょう」。眼の前には、ポテトチップスが映し出されたモニター、手元には、鉗子（はさみ）といわれるペンチのような形状をした器具があった。私は画面に映し出されているポテトチップスの端を、手元の鉗子で摘まみ上げた。——思わず鳥肌が立った。力を入れすぎると割れてしまいそうなプニプニした感触をあまりにもリアルに感じ取ることができた。

遠くの場合にあるモノの感触を、時空を超えて感じる。人類は、音（聴覚）を伝送するテレ・フォンにはじまり、映像（視覚）を伝送するテレ・ビジョンを実現させてきた。そして、ついには、力触覚を伝送するテレ・ハプティクスを生み出したのだ。しかも、産みの親が眼前にいる！

早速、企画を進めることになった。世界初・日本発の技術をどう伝えるか。実に悩ましい課題だった。詳細な理論や仕組みは諸々の事情により、すべてを公表できる状況ではなかった。加えて、見ても聞いても分からない「触覚」を扱う学問の本質を、紙媒体上で伝える難しさもあった。さらには、革新的な技術を生み出した大西先生のお人柄や思想にも触れたい。研究会メンバーで検討を重ね、盛りだくさんのテーマに対して自然な理解を促すために、先生と初学者との対話形式で構成し、スマホで動画が視聴できる工夫もした。

本書に携わり、多くの驚きと感動を得ることができ、理工系編集者冥利に尽きる一冊となった。研究室での予期せぬ興奮をきっかけにつくりはじめた本書が、読者へ何かをテレできていればと願っている。

特集＊大学の現在地

大学淘汰の時代がやってきた

伊藤史彦（読売新聞東京本社 編集局教育部次長）

読売新聞東京本社編集局の教育部は、二〇一三年四月に発足した教育ニュースの取材部門だ。部員は約二〇人。初等中等教育など分野ごとに取材班があり、長期連載「教育ルネサンス」などの取材をしている。文部科学省の動きを専門に追う記者も二人いる。大学生の就職活動をカバーする「就活班」は毎週月曜日朝刊掲載の「就活ON!」を担当している。キャンパスを訪問すると、キャリアセンターの掲示板にはたいてい、学生の参考にと「就活ON!」の紙面が貼り出されている。

「大学班」は筆者を含め現在五人。取材範囲は、大学の教育や入試にとどまらず、経営戦略、若者・学生文化、不祥事まで多岐にわたる。最近は、スタートアップの育成、地域振興、女性活躍推進などなど大学への注文は増える一方だ。大学という「窓」から日本社会が抱える諸課題を見つめているようなもので、私たちも勉強しながら、日々の

取材に駆け回っている。

「改革か、さもなくば撤退か」

「個別の大学の努力や工夫で乗り越えるのが困難な状況になりつつあり、手を打たなければならぬ」。私たちの取材に、文部科学省の幹部の一人は強調した。

二〇一八年一月にまとめられた中央教育審議会の答申「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン」は、二〇四〇年の一八歳人口は八八万人に減少し、大学進学者は答申時から二割減の約五十一万人になるとの予測に基づき、「教育改革を進めるか、さもなくば撤退も覚悟せよ」と示した。

一九九二年に一八歳人口が二〇五万人から減少に転じて以来、「大学の淘汰は避けられない」と言われてきた。実際には、特に女子の大学進学率上昇にも助けられて、大学

進学者数は二〇〇〇年以降、六〇万人超で推移してきた（昨年は約六三万五〇〇〇人）。ただ、来春二〇二四年度入学の一八歳人口は前年から三万人以上も急落して約一〇六万人となる。持ちこたえられなくなる大学は出てくるだろう。厚生労働省の人口動態統計では二〇二二年の出生数は初めて八〇万人を割り込み七七万人となった。グランドデザイン答申が前提とした人口予測を超えるペースで、少子化は加速している。

日本私立学校振興・共済事業団の二〇二一年度調査では、私大を運営する五六八学校法人のうち、七四法人が経営難で、一二法人は四年以内に資金繰りがショートする可能性があるとしている。私学事業団が全国の学校法人向けに二〇二一年一月に公開した「経営改善のためのハンドブック」は、経営難に陥った時の選択肢として、撤退や法人解散、合併や統合の手續きも示し、話題となった。吸収合併や学部の譲渡を希望する法人には、私学事業団が受け入れ先候補との「顔合わせ」も調整するという。

文科省は、私立大学の経営破綻が相次ぐ可能性もあるとしてルール作りを乗り出している。最大の課題が、大学が突然閉鎖された場合の学生保護だ。

二〇一三年に乱脈経営などを理由に私立学校法に基づく解散命令が出された学校法人堀越学園（群馬県）のケースでは、同法人傘下の大学や専門学校の在学生の転学支援が大きな問題となった。解散命令を控えた二〇一二年一二月、

前橋市内で開かれた文科省と群馬県主催の支援説明会を取材したが、会場に詰めかけた学生や保護者らの青ざめた表情が強く印象に残っている。大学の破綻は、多くの在学生の生活や将来の人生をも狂わせる「悪夢」だ。

破綻した大学の学生を他大学に受け入れてもらうにしても、私大は、定員を一定以上超過すると私学助成の減額というペナルティを科せられる。そこで文科省は、学生を受け入れる大学については定員超過をしても助成金を減額しない特例を設けることを検討している。大学が自主的に撤退を決断して学生募集を停止しても、現行制度では閉鎖まで必要な教員数を維持しなければならない。文科省は募集停止に伴い、教員数を段階的に減らせるよう法令改正も検討するという。

激化する受験生争奪戦

今春は恵泉女学園大（東京都）や神戸海星女学院大（神戸市）、上智短大（神奈川県）、龍谷短大（京都市）などで学生募集停止の発表が相次ぎ、「大学淘汰の時代」を印象づけることとなった。

恵泉女学園大は、特色ある教育に取り組む大学を紹介・応援するため読売新聞で連載している「キャンパス探訪」でも二〇二二年九月に登場していただいた大学だった。留学に力を入れていたが、コロナ禍で留学ができなくなり国際系学部への受験生の人気は急落した。そうした影響もあ

つてか、近年は定員割れが続いていた。

学校法人恵泉女学園が公開している決算書類を見ると、付属の中学高校は、經常収支は好調だが、大学が大幅赤字で学園全体の収支を赤字としていた。学生募集状況の好転が見いだせない大学を諦めて、中学高校の経営に注力するとの経営判断もあっただろうとみられる。

私たちは二〇二二年五月時点で、全国の私立女子大七校の定員充足率を調査した。その結果、女子大の六九％が定員割れしていたことがわかった。同年度の私学事業団の調査では、私立大学全体の定員割れは四七・五％なので、女子大の苦戦ぶりが際立つ。

女子大の学部は人文系や家政系、またはその流れをくむ学部が今も多い。受験生や高校の進路指導担当者、予備校に取材すると、女子大には女子高校生が志望したい学部が少ないとの指摘が多かった。

男女雇用機会均等法の施行（一九八六年）などで、女性の社会進出が進み、「結婚や出産で退職」が当たり前だっ

た女性のキャリア観は大きく変わってきた。一九九〇年代後半には、共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回る。リクルート進学総研の小林浩所長は私たちの取材に「今の高校生たちは、母親が働き続ける姿を見てきたので、結婚や出産を経ても生涯にわたって働き続けたいと考えている。そのキャリア観に多くの女子大が対応できていない」と指摘する。

女子大では、生き残りを賭けた改組やカリキュラム改革が相次いでいる。だが、待ち構えているのは共学校も巻き込んだ、受験生の争奪戦だ。

従来は学生の大多数が男子で占められていた理工系の大学・学部は、女子学生比率の向上に向けて猛烈に動いている。女子高校生限定のオープンキャンパス開催を手始めに、女子高校と教育連携協定を結んだり、指定校推薦の入試枠を増やしたりしている。昨年、東京工業大が入試で一四三人分（東工大の総募集人数の一四％）の「女子枠」創設を発表して注目を集めたが、私立でも東京理科大や芝浦工業大

◆現代史の第一級史料、ついに公開！ A5判 内容案内進呈

昭和天皇拝謁記

―初代宮内庁長官 田島道治の記録― 全7巻 全完結

田島道治

編集委員 古川隆久・茶谷誠一・富永望
瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真

協力 NHK

① 拝謁記 1 昭和二十四年二月、
昭和二十五年九月

② 拝謁記 2 昭和二十六年一月、
昭和二十六年六月

③ 拝謁記 3 昭和二十七年六月、
昭和二十七年七月

④ 拝謁記 4 昭和二十七年七月、
昭和二十八年四月

⑤ 拝謁記 5 昭和二十八年五月、
昭和二十八年六月

⑥ 田島道治日記
宮内庁長官在任期+関連時期

⑦ 関連資料
定価115巻・7巻1各3300円
6巻3300円

解説 瀬畑源



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋
www.iwanami.co.jp

など女子枠を設ける大学は広がる。都内の私立理工系大幹部は「我々にとって女子は手つかずの市場。企業も優秀な女性エンジニアを求めている。少子化時代を生き残っているためには、女子学生獲得は不可欠だ」と力を込める。

受験生ニーズに応じた学部新設が成功するとは限らない。職業に直結する資格が取得できる学部が受験生を集めるとして、薬学部の新設が一時、全国で相次いだ。だが、薬剤師国家試験の合格実績は二極化し、現在は学生獲得に苦戦する薬学部が目立つ。

共学校も含めて設立ラッシュとなっているデータサイエンス関連学部は、すでに供給過多が指摘されはじめた。数学の理解が必須の分野だが、河合塾が私大情報系学部の一一般入試募集枠について調べたところ、約半数が数学科目の受験を必須としていなかった。卒業時には他と差別化できるだけの能力を身につけさせたかどうかが問われることになると思うのだが、そもそも「入口」で安易なメッセージを発してはいないだろうか。高校や予備校では、入試科目の構成も大学の姿勢を測る指標だと、高校生たちに教えはじめている。

大学側の受験生獲得の都合を、高校側は冷ややかに見て

「獲得レース」

いわゆる「上位校」「伝統校」も、サバイバルから無縁

ではいられない。

政府による一〇兆円規模の大学ファンドが動き出した。財政投融資などで確保した一〇兆円を債権や株式などに投資し、年三〇〇億円を目標とする運用益を大学支援にあてる。世界レベルで競う研究大学を目指す「国際卓越研究大学」に認定されれば、最長で向こう二五年間、毎年数百億円規模の「異次元の支援」が受けられ、世界トップレベルを目指した研究設備の整備や国内外の優秀な研究者の獲得などに充てられる。その効果や評判は、回り回って大学のランキングや入試偏差値にも及ぶだろう。

国立大学への運営費交付金は二〇二二年度、計一兆七八六億円で、国立大学が法人化した二〇〇四年から一割以上減った。代わりに期限付きの「競争的資金」が増えた。研究力を高める狙いだったが、若手研究者の雇用が不安定化し、学生の博士離れが進んだ。人件費を抑制するため、退職した教授（ポスト）の補充を見合わせる動きが広がり、国立大も教育力の低下にあえぐ。

「異次元の支援」を研究大学は無視できないだろう見ていた。だから昨年夏、「東京工業大学と東京医科歯科大学が秘密裏に統合協議を進めている」と知った時は、驚きつつも「ついに動いたか」と思った。

臨床医学分野で国内屈指の医科歯科大が世界レベルの研究大学を目指すには、理工系分野との連携強化が欠かせない。東工大は理工系に強いが医学部がない。両者が組めば、

科学革命の構造

新版

クーン 世界の見方を変えた名著を21世紀的解像度の新訳で。原著刊行50周年記念版。I.ハッキング序説 青木薫訳 ¥3300

新資料が語るゾルゲ事件2

ゾルゲ伝

スターリンのマスター・エージェント マシューズ 大戦前夜の日独ソ情報戦と人間模様。世界を変えようとして彼は何に殉じたのか。英国話題作。鈴木・加藤訳 ¥6270

認知アポカリプス

文明崩壊の社会学

プロネール 規制なき認知市場にスマホでつながれた人類の未来？ 認知科学と社会学で解く人の行動と心理。高橋 啓訳 ¥4400

ヨーロッパの極右

カミュ/ルブール 19世紀から現在まで、根深く息づく極右の矛盾に満ちた全貌を明らかに。南 祐三監訳 木村高子訳 ¥5940

免疫から哲学としての科学へ

矢倉英隆 免疫の本質とは何か。実証科学と人文学を縦横に行き来し、より深く包括的な知のあり方を探る野心的論考。 ¥4400

アディクションと金融資本主義の精神

鈴木直 認知機能が短期報酬を求めて無限に暴走、実体経済が敗北し資本主義のカジノ化が進むメカニズムと回避策。 ¥5830

通訳者と戦争犯罪

武田珂代子 アジア太平洋戦争下の日本軍側通訳者が有罪とされた事例を精査。今日の通訳者の責任と倫理を論じる。 ¥4950

東京文京本郷 2丁目20-7 **みすず書房**
tel.3814-0131 fax.3818-6435(税込)
www.ms.z.co.jp

国立大運営費交付金の規模では筑波大や北海道大に並び、研究力でも東大や京大などに近づく「理系の総合大学」になる。一握りの有力国立大に予算を集中させるための「出米レース」（地方国立大学長）とも揶揄される卓越大だが、強力な対抗馬が登場したと、私たちは受け止めた。

ただ、卓越大は、巨額の支援と引き換えに重い宿題が課せられる。毎年三割ずつ大学外からの収入を増やして教育研究の規模を拡大させていくことが必須となる。二五年後には大学がもう一つできる計算だ。さらには経営の透明性や効率性を確保するため、国立大には、学外者が半数以上を占め、大学の経営方針の決定や学長の選考や監督権限を握る「法人総合戦略会議」の設置といったガバナンス（組織統治）改革も義務付けられる。「外圧で大学の研究が左右されないか」と懸念する大学人は少なくない。そもそも大学ファンドが毎年、運用益を生み出し続ける保証もない。

それでも卓越大の申請期限の今年三月末までに、東京大や早稲田大など一〇校が申請した。うち一校は、東工大と

医科歯科大が新大学「東京科学大」として共同申請した。説明資料をそろえて報道各社の取材を待ち構えていた大もあつた一方、半数の大学は取材そのものを拒んだ。ある申請校の関係者は「卓越大の支援がなければ実現不可能な計画ばかりで表に出せない」と漏らす。学生言葉を使えば、相当「盛った」計画を出してしまつたようだ。文科省の補助金事業に背伸びをして手を上げて、いざ採択されると実現の困難さに学内から怨嗟の声があがるのは、大学界限を取材しているとたまに聞く話だ。

卓越大の審査は今年秋まで行われる予定だが、文科省側は審査過程で大学とも話し合い、申請計画の「磨き上げ」も行つていくと予告している。政府関係者はしきりに「認定ゼロ校もありうる」と強調する。最後まで大学同士に競争させる意図は明白だ。大学がなにを約束させられ、どのように実行していくのか、私たちはこれからも注目していく。

学問の自由から考える大学ガバナンス——近年の大学ガバナンス改革論の問題点

佐藤岩夫（東京大学特任教授）

はじめに

近年、というよりも、すでに二〇年以上の長期にわたり、日本の大学をめぐるのは「大学ガバナンス改革」が大学政策の重要課題として取り上げられている。全国の大学はそれに翻弄されているといってもよいかもしれない。しかし、この大学ガバナンス改革をめぐるのは、本来重要であるはずなのに、それに関わる政策文書では——おそらく、あえて——触れられていない重要な論点がある。大学ガバナンス改革と学問の自由や大学の自治との関わりである。私たちはこの重要な論点を見失ってはならない。

本稿は、大学ガバナンスの問題とは本来学問の自由や大学の自治をどう考えるかという問題そのものであるという基本的見地から、近年の大学ガバナンス改革をめぐる議論の問題点を振り返り、それを学問の自由・大学の自治の視

点から捉え直すことを試みる。（大学における学問（学術研究およびそれと不可分に結びつく高等教育）の自由を保障し、学問の発展を通じて社会に貢献するための、大学の意思決定の仕組み）、それが筆者が考える「大学ガバナンス」である。

近年の大学ガバナンス改革論の問題点——学問の自由・大学の自治の不在

言うまでもなく、学問の自由は、大学の使命を達成する上で不可欠な要件であり、大学の本質的屬性の一つである。日本国憲法は、第二三条で「学問の自由は、これを保障する」と定め、その具体的内容としては、学問研究の自由、研究成果発表の自由、教授の自由があげられる。また、大学における学問の自由を保障するために大学の自治が保障される（最高裁一九六三〔昭和三八〕年五月二二日判決〔東

大ボボロ事件)。この大学の自治の内容としては、人事の自治、および、施設・学生管理の自治が含まれ(前掲最高裁判決)、これに財政の自治を加える理解もある。学問の自由と大学の自治についてのこのような理解が、大学のガバナンスを考える場合の出発点となるはずである。

ところが、政府の大学ガバナンス改革に関する政策文書においては、「学問の自由」や「大学の自治」に直接触れられることはほとんどない(紙幅の関係で詳細は省略するが、たとえば広田照幸『大学論を組み替える』名古屋大学出版会、二〇一九、二四五頁、羽田貴史他編『学問の自由の国際比較』岩波書店、二〇二二、三〇九頁参照)。なお、近時、大学に関するガバナンス・コードが大学団体も加わって作成・公表されているが、教育学者の羽田貴史は、「学問の自由についてふれるものは『国立大学法人ガバナンス・コード』(二〇二〇年三月三〇日)のみで、しかもわずかに二カ所で言葉としてあるだけで、具体的に学問の自由を保障する行動原則を述べているわけではない。アメリカ教育協議会など二六団体の『学問の権利と責任についての声明』[Statement on Academic Rights and Responsibilities, June 23, 2005]と比べると、信念の貧弱さは覆うべくもない」と記している(羽田他編・前掲書、三〇七頁)。これらがバナンスコードの策定には大学を代表する団体も参画しているだけに、政府だけでなく、大学側も課題を残したと言うべきであろう。

他方、各種の政策文書で、「大学の自治」に代わる言葉として多用されているのが、「大学の自主性・自律性」である。「大学の自主性・自律性」について論じること自体に異論はないが、ただし、政府の文書において、この「大学の自主性・自律性」が独特の文脈をもって用いられていることは多くの論者によって指摘されている。

たとえば、現在の国立大学法人制度の基盤となる整理を行った文部省(当時)の国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議最終報告『新しい「国立大学法人」像について』(二〇〇二年三月二六日)を取り上げた憲法学者の蟻川恒正は、同文書では、「大学の自治」という言葉の使用が周到に避けられる一方、それに代わる語として「大学の自主性・自律性」が用いられていることを指摘する(蟻川恒正「国立大学法人論」ジュリスト一二二二号、二〇〇二)。そして、この「大学の自主性・自律性」には二つの系統の観念がある。一つは「大学本来の自主性・自律性」であり、もう一つは「大学運営の自主性・自律性」である。蟻川によれば、「大学の自治」の代用として用いられているのは後者(大学運営の自主性・自律性)であり、それは、大学運営に関する基本原理を、それまでの「教授会自治」|| 「教員団(Faculty)による運営」から「管理者(manager)による運営」へと転換することを意味している。このことは、旧来は「教員団」という実体において統一的に把握されてきた二つの自主性・自律性の主体間に、「大学本来の自主

性・自律性」の主体Ⅱ「教員団」と「大学運営の自主性・自律性」の主体Ⅲ「管理者」という分裂を顕在化させた。

また、教育学者の広田照幸は、一九九八年大学審答申『二世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学』（一九九八年一〇月二六日）から二〇一四年学校教育法及び国立大学法人法の一部を改正する法律（いわゆる「ガバナンス改革法」）に至る一連のプロセスを、「教授会の『自治』から大学の『自律』へ」という大きな転換として捉え、その意味を次のように解説している。『大学の自治』は伝統的に『学問の自由』の一部に位置づくものとみなされてきた」の対して「一九九八年以降急速に進んだ『大学の自律性』は、組織・経営の戦略や効率とつながるもので、そこでの『自律』とは、組織内の一般構成員の意向には左右されない、という意味に変質している」（広田・前掲書、二四一—二四二頁）。

近時のガバナンス改革は、学問の自由や大学の自治に触れることがないというにとどまらず、伝統的な大学の自治Ⅱ教授会自治を否定する意図を持つものであった。

学問の自由から大学ガバナンスを考える

このような議論の動きの中にあつて、私たちは大学ガバナンスの問題にどのような姿勢で臨むべきであろうか。

第一に指摘すべきことは、学問の自由という原点に立ち戻って考えることの重要性である。これは次の二重の意味

においてである。まず、学問の自由は大学の本質的属性の一つであり、この大学における学問の自由を保障するため大学の自治が保障されるという考え方からすれば、学問の自由および大学の自治との関係に触れることなく大学ガバナンスを議論する現在の風潮には重大な欠陥がある。

同時に、大学の自治のあり方も、あらためて学問の自由との関係で、その具体的あり方を考える自由度を持つてもよい。教授会自治は日本において重要な意義を持つてきたし、今でも教授会を基盤に考えるべき事柄は少なくないが、大学の自治Ⅱ教授会自治とまで考える必要はなく、学問の自由を実現するに相応しい大学の意思決定のあり方、教員団の参加の仕組みを考える余地がある。たとえば、国立大学で言えば、教授会と並んで、教育研究評議会のより積極的な活用なども視野に入れられてよい。

第二に、大学のガバナンスを考える場合には、筆者は、権限を一人（たとえば学長や理事長）あるいは一つの組織に集約させる考え方は適切ではなく、大学を構成するさまざまな役割者や組織が権限と責任を実質的に分有し、一方では大学の舵取りを共同して行い、他方では、適切に相互牽制を行う仕組みをつくること、「シエアド・ガバナンス（共同統治）」が適していると考えている。

筆者がこのように考えるようになったのは、ある事柄をきっかけに、国立大学における学長の権限や選考をめぐる問題を考える機会があつたことによる。国立大学では、最

終的な決定権限を学長に帰属させる仕組みとなっている(国立大学法人法10条、11条一項)。その上で、国立大学法人法は、その学長の選考を行う重要な権限を学長選考・監察会議に与え(同法12条)、さらに最近では、この学長

選考・監察会議の学長に対する牽制機能を強化している(二〇二二年国立大学法人法改正)。では、学長選考・監察会議の権限を強化しさえすればよいかと言えば、そうではなく、今度は学長選考・監察会議を牽制する仕組みも必要である。筆者の所属する大学では、二〇二〇年秋の総長選考をめぐる混乱を契機にこの問題への対応を精密に検討した。しかしさらに考えると、その学長選考・監察会議を牽制する組織を今度は一体誰が牽制するのか。このように考えていくと、議論は無限背進に陥ってしまう。むしろ、大学内の諸機関の間のバランスのとれた権限の分有と相互牽制(共同統治)という考え方を基礎に制度設計を行うのが適切である。先に筆者が、国立大学において教育研究評議会により積極的な活用なども視野に入ると述べたことも、同

評議会が、たとえば米国におけるアカデミック・セネイト(academic senate)のような機能を果たしうることを期待するからである。

このこととの関連で第三に、今更ではあるが、大学の意思決定への教員団の関与の重要性を指摘しておきたい。財源の多様化や大学を取り巻く複雑な課題に適切に対応し大学を発展させていく上で、学長のリーダーシップが重要であることを筆者は否定しない。また、今日の大学は、広く社会の理解と支持を必要としており、それら社会の多様な意見を大学の運営や長期的な構想にいかしていく仕組みも重要かつ必要である。その上であえて大学の意思決定への教員団の関与の重要性を指摘するのは、近年の大学ガバナンス改革をめぐる議論では、教員団が果たす役割があまりに軽視されていると感じられるからである。大学ガバナンスの課題が、大学の本質的属性である学問の自由を実現するに相応しい大学の意思決定のあり方を考えることにありとするならば、この学問の担い手である教員団の位置づけ

新刊案内

木村周市朗 著

菊判・856頁・定価13200円

ドイツ国家学と社会改革

クラウゼ派自然法論の成立と問題圏

—— カントが開拓した近代の形式原理とは何か。この主流に抗して19世紀ドイツの自然法論(法哲学)が提起した、新たな「諸善の秩序」としての万有の交互的なる生の諸関係Ⅱ「人類的生」の構想に光を当てる。

伊藤セツ・掛川典子 著

A5判260頁定価4180円

アウグスト・ベールベルの『女性と社会主義』と同時代の知識人女性たち

21世紀視点から/ベールベル没後110年によせて

好評発売中 日本における国際女性デー1100年記念出版
伊藤セツ 著(昭和女子大学名誉教授) 菊判・856頁・定価9900円
国際女性デーの世界史
起源 過去、現在、未来

御茶の水書房

〒113-0033 文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751

がまずは議論のベースラインとなるはずである。

ここでその具体的議論に立ち入る余裕はないが、重要な論点としては、教員団が大学の意思決定に参加する全般的な制度設計のほか、学長選考や教育人事のあり方が重要な試金石となる。また、近年政府は、日本の安全保障環境が厳しくなっていること等の理由を掲げて、軍事にも応用できる研究への参加を大学や学術界に求めるようになってきているが、そこでは、学問の自由および学術の健全な発展との緊張関係も生じうる（日本学術会議『軍事的安全保障研究に関する声明』（二〇一七年三月二四日））。各大学においてこの問題にどのように対応するのか、たとえば、研究の適切性を審査する制度を設けるのか、あるいはその審査に教員団がどのように関わるかが問われることになる。

他にも述べるべきことは多いが、最後に、大学ガバナンスの問題を考える場合には、その仕組みに教員団自身が習熟し、それを適切に使いこなしていくことが重要であることを述べておきたい。大学ガバナンスの仕組みは、それ自体相当複雑である。しかし、その複雑性にたじろがずに、教員団自身がこの仕組みをよく知り、使い方に習熟する必要がある。このことが重要であると感じた一つのきっかけは、筆者が所属する大学で総長選考をめぐって混乱が生じた際に、ある部局長が「この問題が生じるまで総長選考会議がこのような重要な権限をもつ組織だと十分理解していなかった」と述べたことである。この部局長自身は大変

見識に富み信頼できる人物であったが、その人物にして述べたこの一言は、やはりわれわれ大学の人間が大学の制度および意思決定の仕組みを日頃からよく知ることが重要であることをあらためて感じさせる契機となった。

筆者の研究分野の一つに非営利・アソシエーション法の研究がある。このアソシエーションに関する重要な議論を展開したのは、周知のように、フランスの政治思想家・トクヴィルであるが、トクヴィルがアメリカのデモクラシーの基盤として注目したのは、組織としてのアソシエーションそのものというよりも、むしろ、それを活用する技術、「結社の技術」（＝「多数の人間の力を共通目的に向けて、しかも非強制的な手段で結集する技術」であった（宇野重規『デモクラシーを生きる』創文社、一九九八）。大学ガバナンスの仕組みも、大学を取り巻く多くの関係者の力を、学問の発展とそれを通じた直接・間接の社会への貢献という共通目的に向けて結集する仕組みであり、大学構成員がそれを使いこなす知識・関心・技術をもつことは大学ガバナンスを適切に機能させる重要な基盤の一つであると、筆者は考えている。

（*）（東京大学）『総長選考会議の組織検討タスクフォース報告書』（二〇二一年三月）、『総長選考会議の組織検討ワーキンググループの検討結果に関する報告（最終報告）』（二〇二一年一月）。いずれも大学のHPに公表されている。

世界の中の日本の大学——国際化の課題と展望

杉村美紀（上智大学総合人間科学部教授）

変容する国際化

高等教育における「国際化」という言葉から誰もがすぐに想像するのは、英語による授業や留学生の送り出し・受け入れということであろう。実際に、国際化に関する高等教育政策が展開されてきたなかでは、留学生移動の促進とそれを促す英語による教育研究活動の展開が大きな柱とされてきた。特に二〇〇九年から二〇一四年まで展開された「国際化拠点整備事業」（通称グローバル30）や二〇一四年から二〇二三年まで実施されてきた「スーパーグローバル大学創成支援事業」では、事業の進捗を図る具体的指標として留学生数や英語による授業の数、外国籍あるいは外国で教育研究活動を行った経験を持つ教員数などが掲げられている。しかしながら、二〇一九年末から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、そうした国際化の基盤であ

った人の移動を止め、オンラインによる教育研究活動を余儀なくさせる事態を生んだ。こうした予期せぬ状況のなかでにわかに注目されるようになったのが、バーチャルな空間で国内外をつなぐ教育研究活動である。なかでも国際協働学習（Collaborative Online International Learning: 通称COIL）とよばれる学習形態は、それまでもあったMOOCsなどの一方向的な学修活動とは異なり、オンラインコミュニケーションを用いて二か国以上の国の間で教室と教室を結ぶ教育学習空間を創出した。今ではこうした教育は「非伝統的な学び」としてとりあげられるようになってきている。

ところでこうした動きは、コロナ禍によって加速されたものの、実際にはコロナ禍以前から議論されるようになっていたことにも注目すべきであろう。そもそもCOILとは、ニューヨーク州立大学によって二〇〇四年に開始された。日本では関西大学が二〇一四年に先駆けて導入している。

二〇一八年には国際化事業のひとつである「大学の世界展開力強化事業」のテーマとして「COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援」が取り上げられている。こうした動きは、国際化のなかでも「国内における国際化

(Internationalization at Home)」の動きとしてとらえられてきた。

またCOILに限らず、人だけではなくプログラムや教育研究を提供するプロバイダーそのものが移動するようになったのも、コロナ禍以前からの動きである。高等教育における国際化に関する先駆的研究者の一人として著名なカナダのJ・ナイト(J. Knight)教授は、こうした動きを「国際プログラムおよび提供者のモビリティ(International Program and Provider Mobility: IPPM)」と表現し、従来の人の移動に加えて国際化の動きに新たな要素が加わったことを指摘している。たとえばコロナ禍の前であっても、英国のブリティッシュ・カウンシルによれば、英国の高等教育機関在籍者の約半数は、英国外からコースを履修していることが報告されている。

国際化をめぐる今日的課題

こうした国際化の変容は、高等教育に新たな課題を生んでいる。そもそも高等教育には、人材育成と知の創生という役割が求められており、各国の国家発展のための教育機関として位置づけられてきた。しかしながら、国際化の進展が人の移動やさらにはIPPMにみられる教育そのものの

移動という新たな動きを促進している。各国において、初等・中等教育があくまでも国民教育政策に即した内容と制度を担保しているのに対して、高等教育の国際化は国家の枠組みを超えた展開をみせている。その大きな要因は、高等教育に対して高まる需要とその結果としての大衆化、さらには様々なセクターが関与する民営化であろう。その結果として起きている急速な国際化は、同時に教育の質をいかに担保するかという課題を生んでいる。

第二に、社会的文化的背景が異なる学生や教員・研究者が交流することで生じる文化接触の問題がある。多様な文化が交差することで、そこにはまた新たな文化が生み出される可能性もあり、大学のキャンパスにさまざまな文化圏からの留学生を受け入れることはインクルーシブなキャンパスの創生を考えるきっかけにもなる。しかしながら、その一方で、移動する人々にとっては異文化適応や摩擦の問題が、また受け入れるホスト側の人々にも、体制の整備などの新たな課題が求められ、それらがうまくかみ合わないときには差別や偏見の問題が生じることもある。日本社会では一九八〇年代から「内なる国際化」という表現で外国人労働者の受け入れへの対応が議論されてきたが、今日ではそれが高等教育においても「国内における国際化」を進めるうえでの課題となっている。

第三に、本来は知の創生として促進されるべき国際化が、今日では経済安全保障という新たな問題を引き起こしてい

る。二〇二二年に日本で公布された「経済安全保障推進法」の背景によれば、経済安全保障が問題視されるようになってきたのは、国際情勢の複雑化や社会経済構造の変化等により、安全保障の問題が経済分野にまで及ぶようになり、国家・国民の安全を経済面から確保する取り組みが必要になったためであるとされる。同法による四つの制度の中に含まれる「先端的な重要技術の開発支援」という観点は、高等教育機関の学術交流によって知識や技術の開発が促進されると同時に、それらが流出することによって安全保障に影響を及ぼすことを危惧する動きが生じ、近年では留学生の受け入れや送り出しにおいても、知的財産の管理を含めた観点到配慮が求められるようになった。

第四に経済安全保障の問題と関連して、研究の倫理や公正性をいかに担保するかという研究インテグリティの問題も焦点化されている。本来、高等教育機関においては学術研究機関として学問の自由が担保されるべきであり、そこでの議論は広く開かれたものであるべきである。国際化は

まさにそうした高等教育の持つ特性を活かし、人々の移動や異文化間交流が、多様な見方と考え方、価値観を共有しあうなかで新たな学問知を想像する一つの要であるといえる。しかしながら実際には、国際化が進む中で、それぞれの社会体制との差異や、前述の文化摩擦や経済安全保障といった諸問題が生じることで、逆に国境を強く意識せざるを得ないナショナリズムを呼び返している事例もみられる。

研究拠点と国際化

以上述べたように、国際化の促進は、その変容と課題のもとで、今日新たな様相を呈している。そうした変化は、従来の学生モビリティに加え、大学における研究力強化と研究拠点化を結果的に促進するようになってきている。高等教育が知の創造に重要な役割を担うことは繰り返すまでもないが、大学の国際的なランキング制度が広く知られるようになって以降、研究力の強化は、引用文献数やレピュテーションといった項目が評価に大きな影響をもつことから、

(好評既刊)

目でみる牧畜世界

21世紀の地球で共生を探る

シンジルト編 多様な気候風土の中、様々な家畜を遊牧・移牧・放牧する。牧畜の民とその家畜、社会や文化を描く映像ドキュメンタリー。カラー写真と解説で構成。 2860円

出家と世俗のあいだを生きる

インド、女性「家住行者」の民族誌
濱谷真理子著 出家修行と家庭生活。二つの世界を「家住行者」と呼ばれる女性たちがどう両立させ、どう自分らしく生きるのか。 5500円

客家

エスニシティの形成とその変遷
瀬川昌久著 民族的出自の垣塙・華南。その文化モザイクから、ある「民系」の自画像・他者像が作り上げられていった。克明な考察。 3960円

台湾原住民族研究

の足跡 近代日本人類学史の一側面

笠原政治著 伊能嘉矩、森丑之助、馬淵東一らが繋いだ研究の松明。日本人類学の骨格にも至る濃密な現地／人との交流を描く。 3960円

能楽の源流を東アジアに問う

多田富雄「望懐歌」から世阿弥以前へ
野村伸一・竹内光浩・保立道久編 「恨」と「幽玄」の軌跡が交わる時。その歌と舞は、東アジア芸能史千年の系譜に連なり、民衆の来し方を写す。成立の謎に迫る。 1980円

21世紀のグローバリズムからみたチンギス・ハーン

ボルジギン フスレ編 歴史・社会・政治・文化など最新の研究からチンギス・ハーンとその時代を再評価。日蒙国際シンポの成果。 3850円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒 03-3828-9249 (価格は税込)
URL: <http://www.fukyo.co.jp>

ランキングの位置づけを大きく左右するものとしてより重視されるようになっていく。ランキングの是非については様々な議論があり、ランキングありきとなってそれに左右されるのは本意ではないという意見も多い。しかしながら、世界の留学生が留学先を選ぶ際の一つの指標になっていることもまた事実であり、無視できない状況となっている。

こうしたなかで今般、世界に並び立つ大学の支援策として日本政府が立ち上げた「二〇兆円ファンド」の創設は、高等教育政策のなかでも特徴ある施策である。この基金創設の背景には、良質な論文数に示される日本の研究力や国際競争力が相対的に低下している一方、若手研究者のポストの不安定さが原因となり博士後期課程の学生数も減少傾向にあり、加えて大学の資金力も、世界トップ大学との差が拡大の一途をたどっているという状況がある。こうした現状に対して、世界トップ研究大学の実現に向け、財政・制度両面からそれを支援する仕組みとして、科学技術振興機構（JST）に財政投融資による大学ファンドを設置し、その運用益により大学の研究基盤への長期・安定的投資を抜本的に強化し、世界トップ研究大学に相応しい制度改革を実施するという施策が示された。このファンドに選ばれ「国際卓越研究大学」と称されるのは数校であり、二〇二三年度運用が開始され最長二五年間といわれる長期間のなかで、制度改革を進め、国際競争力を高めることが求められる。

一方、二〇二二年に総合科学技術・イノベーション会議

が決定し、政府がとりまとめた「地域中核・特色ある研究大学総合振興パッケージ」では、①強みを持つ特定の学術領域の卓越性を発展させる機能、②地球規模の課題解決や社会変革に繋がるイノベーションを創出する機能、③地域産業の生産性向上や雇用創出を牽引し、地方自治体、産業界、金融業界等との協働を通じ、地域課題解決をリードする機能、といういずれか又は組み合わせた機能を有する大学を選定する、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」というスキームが打ち出された。このスキームでは相乗的・相補的な連携により、研究大学群として発展していくことが期待されている。

連携と協力が拓く国際化

こうした研究力強化の動きに加えて、今後、ますます重要になってくると考えられるのが連携と協力である。「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」でも研究大学群としての展開が期待されており、人材や財政など様々な面でリソースが限られた中で、ガバナンス上の要点となっている。それは国内の大学の連携にとどまらない。学生のモビリティに加えてトランスナショナルな高等教育が進展するなかで、国外の大学との連携は国際化の重要な戦略となっている。

教育未来創造会議が二〇二三年四月に発表した「未来を想像する若者の留学促進イニシアティブ」の第二次提言で

は、二〇三三年までに日本人学生の派遣を五〇万人、外国人留学生の受け入れを四〇万人とするという目標が示され、あわせて国際化の指標として英語のみで卒業・修了できる学部・研究科の数の増加、海外の大学との交流協定に基づく交流のある大学の割合の増加、さらにジョイント・ディグリーやダブル・ディグリープログラムの増加を掲げている。そこでは、教育の国際化を、①多様な学生や研究者が切磋琢磨できる教育環境の活性化とイノベーション創出につながる大学等の国際競争力の強化、②国際頭脳循環の実現、国際研究ネットワークの構築、③多様性、包摂性のある地域・社会の構築に資する教育環境の整備ととらえている。またそのためには、国内大学等の国際化や高度外国人材の活躍に向けた教育環境の整備、国内大学の海外分校や高専を始めとする日本型教育の海外展開、高度外国人材が安心して来日できる子どもたちの教育環境の実現、日本語教育機関の質の向上を図り、知日層の拡大や相互理解促進を進め国際プレゼンスの向上を図るとされている。

少子高齢化と労働力不足が懸念される日本社会にとって高度人材の確保は喫緊の課題であり、国際化はその重要な手段であると同時に、経済発展に必要な不可欠なものである。一方で、高等教育には、地球規模の課題を解決していくための知の結集とそれを担う人材の育成という責務もある。そして今日の学術の発展には、異なる分野との連携と、様々な文化を持つ多様な研究者の協働とネットワークが必要不可欠である。国際関係が複雑化し、時には厳しさを増すなかで、お互いの違いを知り、共通の価値観をつくることや、国家の利害を乗り越え、友人、仲間として多層的な信頼関係を築くことは、平和と人間の尊厳を守るための科学の発展には必要不可欠である。世界の一体化を意味するグローバル化ではなく、あくまでも国家の特質を保ちながら諸国との関係を築く国際化においては、利益を調整しながら知の創造に挑み、人類社会に貢献する公共財を守り育てるという高等教育の果たすべき方向性を、今一度強く認識すべきであると考ええる。

地域からの視点で近世日本をたく

家からみる江戸大名

全7冊 刊行中

各2420円

【既刊4冊】

徳川将軍家 総論編

野口朋隆著 「家」的支配の実像。

南部家 盛岡藩(2刷)

兼平賢治著 北奥の藩主の290年。

井伊家 彦根藩

野田浩子著 譜代筆頭としての使命。

毛利家 萩藩

根本みなみ著 いかに存続させたか。

【続刊】 『内容案内』呈前田家(加賀藩)……宮下和幸著伊達家(仙台藩)……J・F・モリス島津家(薩摩藩)……佐藤宏之著

『小右記』と王朝時代

倉本一宏・加藤友康・小倉慈司編
棋周期の最重要史料『小右記』をとことん深掘り！ 4180円

戦国の城攻めと忍び

北条・上杉・豊臣の攻防
戦国の忍びを考える実行委員会
埼玉県立嵐山史跡の博物館 編集
城を攻める、守る！戦国の闇を駆け抜けた「忍び」の実像。2200円

古記録入門

高橋秀樹著 (増補改訂版)
もう古記録はこわくない！漢文日記精読の極意を伝授。2860円

近代日本メディア史

【I】1868—1918 有山耀雄著
明治維新後の「文明開化の新聞紙」から、政府による統制、第一次世界大戦まで。4950円 II=続刊

中田 薫

【人物叢書319】
北 康宏著 「大学の自治」学問の自由のために戦った日本の法制史学の創始者。2640円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151
目録・呈 価格税込



失われた一〇年？——私の東大国際交流記

葛西康徳

(東京大学名誉教授／一般社団法人OCTOPUS理事長)

はじめに 「インタビュアー 開かれた日本の大学へ」は、『大
学出版』九一号(二〇一二年)に発表されました、あれか
ら一〇年が経過し、日本の大学は果たして「開かれた」で
しょうか。

なお、このインタビューは「学士課程の再構築」と解題
のうえ『文化転移』に再録(二四〇―二五一頁)されてい
ますのび、¹⁾一読ください([https://www.u-tokyo.ac.jp/
biblioplaza/ja/F_00054.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/F_00054.html))。

Q 先生の大学在職経験はどのようなものですか？

A 自己紹介から始めたいと思います。私は一九七八年三
月に東京大学法学部を卒業し、同学部助手(ローマ法)、新
潟大学、大妻女子大学を経て、二〇一一年四月から一〇年
間、東京大学文学部(西洋古典学研究室)に勤め、二〇二
一年の三月に定年退職いたしました。

Q なぜ法学部から文学部へ？

A 私は日本では法学部で法制史を教え、イギリスでは西
洋古典学(Classics)を勉強したのです。そして現役生活最
後の一〇年間は母校で西洋古典学を研究・教育することに
なりましたが、私の人生を大きく変えたのはイギリスでの
留学生活でした。

「九月入学」とPEAK

Q 今回のエッセーのタイトル「失われた一〇年」の意味
は何ですか？

A 平成の三〇年間日本の経済は停滞し、「失われた三〇
年」と呼ばれていますが、私にとって東大の一〇年間は、い
わば「国際交流奮闘の一〇年」でした。退職後、その評価
を下すとネガティブにならざるを得ません。

Q 具体的に話していただけますか？

知泉書館

ヘーゲル全集 第13巻

評論・草稿 I (1817-25)
責任編集：石川伊織・海老澤期
善一・山口誠一 ベルリン期
前半までの刊行物、草稿など
9篇を収録 菊/434p/6000円

対話と共生思想

金子晴勇 対話により自分を
発見し、相手を深く知る。そ
れから社会が誕生する経緯を
説明 四六/304p/2700円

カテナ・アウレア

マタイ福音書註解 下
(知泉学術叢書 24)

トマス・アクィナス／保井亮
人訳 東西教父の四福音書註
解を活用、中世の豊かな知
の集大成 新書/920p/7000円

全きヒューマニズム

新しいキリスト教社会の
現世的・霊的諸問題

J. マリタン／荒木慎一郎訳
全体主義の中で人格の自由、
多元主義等を唱えた名著が現
代に甦る 四六/392p/2700円

工科系学生のための 〈リベラルアーツ〉

藤本温・上原直人編 技術系
志望の学生に、工学や技術の
意味や可能性の客観的な見方
を提供 四六/220p/1800円

古典の挑戦

古代ギリシア・ローマ研究ナビ
葛西康徳、V. カッツアート編
国際的に活躍する内外の研究
者が西洋古典学の魅力へ初学
者を導く 菊/584p/5000円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
<http://www.chisen.co.jp>

A まず、東大の「九月入学」問題です。これは、私が東大に赴任した二〇一一年度に突如執行部から提案され、全学を巻き込んで大騒動になりました。結果は、大山鳴動して鼠一匹というべきものでした。もう時効だから申し上げませんが、私の周囲の教員の大多数は反対でしたが、私は賛成でした。この問題は九月入学だけがクローズアップされてしまいましたが、その背景には東大がグローバル競争の中でどのように生き残るかという大きな問題が控えていました。たとえば英語による授業、入試改革、厳正な成績評価など、教育のあらゆる側面に及んでいました。

Q それらの問題はどう解決されましたか？

A 特に英語による授業など学部や学科間によって対応が異なるので、一概には言えません。入試に関しては P E A K (Program in English at Komaba) という特別コースの創設以外は大きな変化はありませんでした。

Q P E A K というのは何ですか？

A あまり知られていないようですね。定員が三〇名なの

で無理ありません。これは大学入学以前に日本語以外の言語で教育を受けてきた人に対し（国籍や学校の所在地は問いません）、一般入試とは全く異なる入試によって合否を決定し、入学者に英語で授業を施すというものです。

Q P E A K は成功しましたか？

A 私は成功しているとは思いません。率直に言って、従来の入試制度を温存するためのゲッターになったと思います。三〇〇〇人の定員のパーセントでは、そもそも話になりません。もちろん入学者や関係教員および職員には何の責任もありません。制度設計の問題です。P E A K に少し関わって、東大のグローバル競争力がいかに低いかがよく分かりましたし、他方では、従来の一般入試のやり方に対する信頼がいかに強いかも体感しました。私が東大に入學して以来半世紀の間、入試方法は基本的に同じです。九月入学案が廃案になったのもむべなるかな、です。

「体験活動プログラム」

Q 先生は国際交流に関してどのような活動をされたのですか？

A 第一に「体験活動プログラム」、第二に「スーパーグローバル事業」、とくにケンブリッジ大学との戦略的パートナーシップ大学プロジェクトです。どちらも、私の東大時代のよい思い出であり、現在行っていることの原点ともなりました。この点で、東大に感謝しております。

Q 「体験活動プログラム」について説明してください。

A この事業は、二〇一二年に開始され、現在も続いております。詳細は東大のホームページをご覧ください。このプログラムの趣旨は、「タフな東大生」を育てることでした。当時の総長と執行部は、東大生は受験勉強しかしていないので、国内国外のさまざまな場所や機関で勉強以外の「体験」をしてほしいと願っていたのだと思います。確かに、当時既に首都圏出身者が東大生の六割以上を占めていました。私が考案したプログラムは、T O P S (Tokyo Oxford Programme of Summer) でした。二〇一二年は二週間のいわば暫定開業で、学部生一二名が参加しました。オックスフォード大学ではパーカー教授やパーソンズ教授など古典学者の模擬授業、ロンドンでは法曹学院の一つインナー・テンプルでクライアン裁判官の講演や裁判所見学、パリスタヤソリシタの事務所見学、それからケンブリッジ大学では

ペイカー教授やイベットソン教授によるコモン・ローについての講演を聴き、最後に、参加者各自が自由論題のプレゼンテーションを、ロンドンのギルドの一つThe Skinners' Company 本部で行いました。同メンバーのエベレット氏の配慮です。

このT O P Sに手応えを感じた私は、翌年から青山学院大学法学部と立教大学法学部と一緒に、四週間のサマープログラムを開設しました。二〇二〇年は新型コロナウイルスにより中止しましたが、二〇二一年は授業と講演、そしてプレゼンに絞ったうえで、オンラインで実施しました。オンライン授業の経験によって、日本にいてもイギリスの先生の授業を受けることができるのだと確信しました。そしてこの確信が、退職後の私の人生を決定することになりました。それについては後述するとして、サマープログラムの概要について、簡単に説明したいと思います。

まず、前半二週間は、古典学とコモン・ローの授業を、オックス・ブリッジで実際に教えている先生から受け(一教科九時間、古典学二科目、法学二科目選択)、ロンドンの裁判所と法曹学院を見学し、三週目は、前半にチュートリアル(先生一人が学生二人を個別指導)とロンドンの法律事務所やグローバル企業などの見学、後半にはケンブリッジに移動し研究会の開催、四週目はエジンバラに移動してスコットランド議会などを見学し、最終日にプレゼンテーション大会を開催しています。

TOPSを一〇年間継続して行うことができたのは、参加大学の支援、とりわけ各大学から必ず教員が学生に随行し、一緒に授業に出てイギリス人教員と（パブで）学問的に交流したからです。最近では、オックス・ブリッジでサマースクールを開催している大学は数え切れませんが、その中で各大学の専任教員が進んで随行している例はどれくらいあるでしょうか？ 大半が専門業者任せ、あるいは仕方なく教員が随行しているのではないのでしょうか。TOPSがその例外であり続けるのは、教員にとってもその授業が面白いからです。もしそうでなくなれば、TOPSはすぐ消えるでしょう。

ところで、二〇一六年に「Azadi」財団が設立されました。この財団は日本の高校二年生をイギリスのパブリックスクールに送り、大学入学準備課程の二年間（Gth Form）と大学入学後の学士課程（三年ないし四年）の学費および生活費一切を支援します。設立時は五名が留学しましたが、現在は一〇名となりました。留学支援を目的とする財団の中で、イギリスに特化し、かつ高校二年生から派遣するというポリシーをもつのは「Azadi」財団だけです。これは創立者田崎忠良氏の実体験に基づいています。私は発足以来この財団の奨学生選考委員を務めてきましたが、海外進学に対する高校生と保護者の関心は、近年急速に高まってきたと実感します。

このような事情から、二〇一七年から高校生もTOPS

に参加することになりました。高校生が大学生と同じ授業を聴いて果たして付いていけるのか、最初は心配しましたが、やってみて全く杞憂に終わりました。これは、「シヨック」でした。たしかに、平均すれば、高校生より大学生の方が授業の理解度は高いと思います。しかし、ザックリ言えば、大差ありません。あるのは個人差だけです。これが意味するところは何でしょうか。

「スーパーグローバル事業」

Q 次に、「スーパーグローバル事業」について説明してください。

A これは正確には「スーパーグローバル大学創成支援事業」と言います。二〇一四年に採択されたこの事業の一環として、東大では海外の有力大学との間に戦略的パートナーシップ協定を締結しました。イギリスではケンブリッジ大学との間に協定が締結され、私はイギリス担当グループの一員として関わることになりました。

Q この事業をどのように評価されますか？

A 他の海外大学はともかく、ケンブリッジに関する限り、彼我の実力の差を見せつけられました。ワールドランキングに偽りはございません。

断っておきますが、東大の研究水準がすべての面でケンブリッジより劣るということを意味しているわけでは全くありません。あくまで私の専門や人的交流にもとづく判断

です。実は、私がケンブリッジ大学との交流のなかでは是非とも実現しなかったことは、学部段階(学士課程)における学生交換です。もちろん、現在東大は世界各国の大学と学生交換協定を持っており、その中には当然イギリスも含まれております。

Q それはどこですか？

A ダラム、マンチェスター、エクセター、グラスゴー、ウオリック、UCL、LSEなどです。オックス・ブリッジは残念ながら入っておりません。日本の大学でオックス・ブリッジと正規の交換協定を持っている大学はありません。

Q だったら仕方がないのではないですか？

A 残念ですが、その通りです。しかし、それでは東大はほかの日本の大学と同じになってしまいます。おそらく東大の教員の大多数は、東大は他の大学とは違うというプライドを持っているはずで、そこで私も失敗を覚悟で挑戦してみました。

Q 結果はどうでしたか？

A やはりだめでした。私を知る限りオックス・ブリッジと正規の交換交流をしている大学は世界で本当に限られています。かつてイギリスはEUに属していたので、いわゆるEU内の交換制度(エラスムス・プログラム)によって多くのヨーロッパの大学と交流していました。現在どうなっているのか私は存じませんが、ここではヨーロッパの大学

のことを言っているわけではありません。私が知っているケンブリッジの交流協定校はMIT、ハーバード、イエールといったレベルのアメリカの大学でした。忘れてならないのは、オックス・ブリッジはコレッジ制をとっており、学生は学部生、院生を問わず必ずどこかのコレッジに属すことです。したがって、交換協定を結ぶ場合はコレッジの承認が必要です。私は学生交流の話を、一九九九年度にオックスフォードのベイリオル・コレッジでも、昨年ケンブリッジのキングス・コレッジでも真剣に行いました。

Q 結果はどうになりましたか？

A 両コレッジとも同じ答えでした。「交流協定自体の趣旨には反対しない。ただ、東大は学士課程の間に一年間も海外に出すほどカリキュラムが緩いのか。うち(オックス・ブリッジ)では、とても学部時代に一年間外に出すほどカリキュラムに余裕はない。また、仮に、東大の学生を受け入れるとすると、その学生のためのチューターを増やさなければいけない。その費用は東大が出してくれるのか」と。

「東大はリザーブで」

Q 先生の東大での一〇年間は格闘の歴史ですね。これから何をされようとしているのですか？

A 学士課程をイギリス、特にオックス・ブリッジで学ぶ学生を日本から送り出したいということ、これに尽きます。そのためにOCTOPUS (Oxford Cambridge Tokyo Pro-

gramme for Universities and Schools) という法人を作りました。

詳細はホームページ (<https://ocopus-edu.org>) をご覧ください。

Q 学士課程に送り出すということは、卒業後の高校生を、東大どころか日本の大学一般でもなく、直接オックス・ブリッジに進学させるということですか。

A いえいえそれだけではありません。東大生も学士入学(留学) していいのです。いや、ぜひ、大学院にいくよりも学部に入學、つまり「学士入学」してください。高校生は、もちろん、卒業後に進學してください。

Q どういうことですか。もう一度、説明してください。

A 何も難しい話ではありません。東大には、毎年、他大学の卒業生が学士入学しているはずで、また、東大のある学部を卒業した人が、別の学部に入學しているはずで、雅子皇后はアメリカの大学を卒業されて東大法学部に入學されたと思います。それと同じことを、オックス・ブリッジでやってくださいということ。

Q 大学院ではだめですか。

A だめです。大学院では視野が狭くなりますし、交友関係も限られます。大学院ならば私はオックス・ブリッジに全くこだわられません。イギリス以外の国、日本でも結構です。

Q でも、日本の大学を出て、また三年ないし四年、イギリスで学士課程をやるのですか？ ちょっと時間が掛かりすぎませんか？

A 何を言っているのです。東大の学士入学は二年で卒業できます。イギリスは何年か、調べてみてください。

Q 最近、東大はじめ日本の大学に合格しても、海外の大学に進学する高校生が増えてきていると聞きましたが、どう思われますか？

A 賛成です。全く違和感はありません。ある意味では、これまでの日本が異常だったのです。日本社会も階級化が進み、ミドル・クラスが成長してきたので、日本の(高等教育)の限界は察知しているはずで、これまでも、我々研究者は海外滞在時に自分の子供を現地の上質な学校に通わせ、余裕のある研究者はそのまま子供を現地で教育させてきました。外交官やビジネスマンの子弟はもちろんです。

私は経済的余裕がなかったので、子供を連れて帰りました。但し、子供の意思を尊重しないとけません。

Q 先生は日本の高校生に期待しているようですね。

A そうです。ただし、私は高校教育(中等教育)については全くの素人ですので、私自身が勉強中です。また、大学生にも「交換留学」という「甘い誘い」に絶対にのらず、日本でしっかりと学士課程を好成績で終えてから、海外の大学に正式に入學してほしいです。

Q 最後に一言お願いします。

A 「東大はリザーブ (Reserve) だ」。

詳細はOC TOPUSのホームページを見てくださいね。

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

大学出版部協会・活動報告

- 三月一七日(金) 一五時三〇分～
第九回 理事会 開催※
- 三月二二日(水) 一五時～
第八回 営業部会 開催※
- 四月二〇日(木) 一四時～
第六回 編集部会 開催※
- 四月二一日(金) 一五時～
第九回 営業部会 開催※
- 四月二八日(金) 一五時三〇分～
第十回 理事会 開催※
- 五月一九日(金) 一六時三〇分～
臨時理事会 開催※
- 五月三一日(水) 一二時三〇分～
定時社員総会・理事会 開催
- 第一回 営業部会 一四時三〇分～
第一回 編集部会 開催
- 六〇周年記念講演 一五時四五分～
開催
- 宇野重規 先生
- (東京大学社会科学研究所教授)
- 春季懇親会 一七時一五分～
開催
- 於…日本出版クラブ

(※ 理事会・部会はZOOMでの開催)

北海道大学出版会

▼櫻井義秀編著『ウエルビーイングの社会学』(A5判・三二〇頁・二八六〇円)
従来の社会学の面目を一新するウエルビーイングのライフコース的アプローチとその課題について概説する、新しい社会学のテキスト。

▼津曲敏郎著『北のモノ・コト・ヒト―ことばと博物館の出会い』(A5判・四五二頁・三九六〇円) 北方少数言語の概要、危機言語、調査旅行記、北方諸言語・民族を扱った書籍の紹介、博物館報に掲載したエッセイ、「コトノハ(コト(意味内容)のハ(端、表れ・媒体))」考など、北方に少数言語を訪ね、危機言語や少数民族へあたたかなまなざしを注いできた著者の遺稿集。

▼清水誠著『ゲルマン語歴史類型論』(A5判・三四〇頁・九九〇〇円)『ゲルマン語入門』(日本独文学会賞受賞)の著者が古今のゲルマン諸語の構造を歴史言語学と言語類型論の観点から体系的に分析。六十余りの言語のデータをもとに属格と所有表現、形容詞変化、「割れ」と短母音化、動詞接頭辞、名詞抱合、後置定冠詞を論じる。

弘前大学出版会

▼嶺岸佑亮・増山浩人・梶尾悠史・横地徳広編著『見ることに言葉はあるのか―ドイツ認識論史への試み』（四六判・四七七頁・三三〇〇円）盲人の世界は独自の豊かさに満ちていると言われるが、それを表現した言葉は、盲人が視力を得て新たに目で見えた世界に適しうるのか？〈当たり前さ〉を過剰なまでに吟味するドイツ哲学の徹底ぶりに迫る。

▼小原良孝著『白神どうぶつ讃歌』（A5判・一〇〇頁・三五二〇円）日本で最初に世界自然遺産に指定された白神山地の動物たちを、動物学者である著者が撮り溜めた写真とその解説で紹介。動物たちの生活痕・足跡などのフィールドサインも盛り込み、白神山地の動物たちの息吹を感じていただける一冊。

▼石井忠・石水毅・梅澤俊明・加藤陽治・岸本崇生・小西照子・松永俊朗編著『植物細胞壁実験法（データベース更新版）』（B5判・四〇四頁・六〇五〇円）初学者から研究者まで、植物細胞壁の研究に幅広く役立つ必携のプロトコール！よく使われる試薬や酵素、データベースなどの情報を最新版に更新。

東北大学出版会

▼東北大学教養教育院編『東北大学教養教育院叢書 大学と教養 4 多様性と異文化理解』（A5判・二三四頁・二七五〇円）人類は群を作って共同生活を行い、身のまわりの自然を変えて快適な生活を実現しながらその文明を進歩させてきた。こうした歴史の背後では、群れが多様な個により構成されてきたことが有効に作用してきたのであろう。しかし反面、そうした多様性は異質性として受け止められ、区別・差別の対象ともなってきた。進化生物学・行動科学・哲学といった個別学問分野の視点から多様性を再考すると共に、研究現場での異文化体験を手掛かりとし、多様性を踏まえた異文化理解のあり方を展望する。

▼伊藤幸博・鳥山欽哉著『植物バイオテクノロジーの基礎知識 環境適応植物工学入門』（B5判・一四二頁・二六四〇円）バイオテクノロジーを駆使し、植物の環境適応に関わる遺伝子に注目。植物が奏でる不思議な生命現象の仕組みを解き明かし、それらの情報を利用して有用形質を付与した新しいバイオテク作物の開発研究を行う新たな学問分野の入門書。

流通経済大学出版会

▼西野博道著『The Future of English Language Spreading Around the World』（A5判・一四八頁・一七六〇円）本書はグローバルランゲージに至った英語の歴史と、インド、シンガポール、南アフリカまで含めた英文学史の両面から英語の本質とその魅力を論じた本邦初の英語英文学史の書である。

▼中山秀登著『民法の流れ図―親族』（B5判・一九八頁・二五三〇円）「親族」の実践原理は弱者を法の強制力をもって無条件に保護することである。本書では、弱者は無条件に保護される権利があり、その義務があるのは、親族か国か、というところまで言及する。

▼Richard D. Duke / Jac L.A. Geuners 著 市川新・市川学訳『戦略的経営のための政策ゲーム―未来との対話』（B5判・三一八頁・二九七〇円）ゲーミングは組織を援助する卓越した手法である。政策ゲームの総体的コミュニケーションの場は未来に必須である。戦略が求められる状況に、未知の領域である政策立案の場に環境を再現して人々の英知を結集する仕組みを提案する。

聖徳大学出版会

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援改訂3版』(A5判・二六七頁・一七六〇円) 初學者のための特別支援教育本。コンパクトなハンディサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

▼聖徳大学児童学部児童学科編『新しい児童学への招待』(B5判・一〇三頁・一三五九円) 幼児教育・保育・文化・心理の教授陣四〇名が協働制作した入門書。薄手の冊子に児童学の様々な素材が凝縮され学びやすい。

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』(B5判・一四〇頁・一七六〇円) 幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。

慶應義塾大学出版会

▼小川原正道著『慶應義塾の近代アメリカ留学生―文明の「知」を求めた明治の冒険』(四六判・二六八頁・三三二〇円) 明治期、彼らはアメリカで何を学び、日本の近代化のために何をもたらしたのか。象徴的な事例・人物を取り上げ、当時の資料を駆使し、その事績を明らかにする。

▼渡辺保著『吉右衛門「現代」を生きた歌舞伎役者』(四六判・三五二頁・三五二〇円) 歌舞伎の世界に現代にも通じる「人間」を発見し、近代から現代へと歴史的な転換を遂げさせた吉右衛門の舞台の景色を描いてその意味を検証する。

▼中村優介著『イギリスの戦後ヨーロッパ構想とフランスの再興』(A5判・三一二頁・五五〇〇円) ド・ゴール支持に消極的だった英国。なぜ支持に転じ米國を説得するようになったのか。戦後秩序の形成過程を追う力作。

▼B・S・ポール著／今井亮一訳『スノーピーがいたアメリカ―「ピーナッツ」で読み解く現代史』(四六判・三六八頁・三九六〇円) ・スノーピーで知られる人気がコミック『ピーナッツ』を通して、激戦の戦後アメリカ社会を読み解く。

専修大学出版局

▼岩澤龍彦著『ハルネス・マイヤーの建築思想と独ソ建築界(一九二六―一九三〇年)』(A5判・三三二六頁・三七四〇円) スイス人建築家ハルネス・マイヤーの一九二〇年代後半の活動を、当時の独瑞露の建築家たちの言説から独ソ建築界の中に位置づける。



▼川津大樹著『FASB概念フレームワークの形成過程の論理―質的特性を中心として』(A5判・二八六頁・三三〇〇円) 米國財務会計概念書第2号、第8号に焦点を当てて、コメント・レターを分析し、会計における概念フレームワークの形成過程を解明する。

▼植田敦紀著『環境財務会計各論』(A5判・二二二頁・三七四〇円) 企業環境活動が増大するとともに環境会計情報の重要性が高まっている。本書では環境会計情報を概観し、近年注目される環境問題、土壌汚染や排出量取引などを取り上げ論考する。

玉川大学出版部

▼佐藤浩章著『大学教員の能力開発研究』(A5判・二三二頁・四九五〇円) コロナ禍は、図らずも史上最大規模のFD(Faculty Development)を国内各地や全世界にもたらしたと同時に、ポスト・コロナ時代の大学教員とFDの変容を加速させた。国内外の大学教員の能力開発の構造と評価を、その発展と実態により明らかにし、研究と実践の双方からこれからの時代と社会に相応しいFD概念を提言する。



▼野坂悦子作・いたやさとし画『あしたの動物園 熊本市動物園のおはなし』(B4変判・三四頁・一九八〇円) 二〇一六年四月、熊本を襲った大地震。動物園も大きな被害を受け、休園に。復活までの日々を、ひとりの飼育員の目を通して描きながら、いまある命、そして未来の命を守る大切さを伝える。「未来への記憶」シリーズ第四弾。

中央大学出版部

▼中央大学法学部編『都市政治論』(A5判・三一六頁・二九七〇円) 社会学、都市計画、政治過程論、行政学、政策過程論、地方自治の研究者が、権力、ガバナンス、市民社会の視点から体系的かつ詳細に都市政治を論じる。都市政治論・地方政治論の講義や演習の教育として最適な教科書。

▼山内惟介著『憲法と国際私法』(A5判・七九二頁・一〇四五〇円) 国会が外国法に国内法源性を付与できるとする憲法上の根拠は何か。憲法規範の解釈論は国際私法の伝統的な理解を見直す契機を与える。婚姻の成立を主張するシリア難民の児童婚夫婦に対して、人権規定はどのように適用されるか追究する。

▼ピール・コラート/ダニー・ブッシュ/トーマス・インカルザ編著 杉浦宣彦訳『欧州金融規制』(A5判・七一二頁・九三五〇円) セクター別規制から金融ビジネスの実態に合わせた規制へと変化しつつある欧州金融規制の状況を欧州における気鋭の研究者と実務家が解説した論文集を欧州で著者達と共に研究活動をした元金融庁研究官が翻訳した力作。

東京大学出版会

▼菊間晴子著『犠牲の森で―大江健三郎の死生観』(四六判・五一二頁・四八〇〇円) イメージ分析を主軸に、様々な領域のテキストからの影響、同時代的な社会状況、故郷の歴史・空間性などを踏まえ、大江作品における死生観を描く。【第一二回東京大学南原繁記念出版賞受賞作】

▼邱函妮著『描かれた「故郷」―日本統治期における台湾美術の研究』(A5判・三五二頁・九五〇〇円) 近代化の中で郷土芸術―「台湾美術」の創造を求められた芸術家たちが、独自の故郷イメージをつくりあげていった過程をたどる。

▼平田祥人・陳洛南・合原一幸著『非線形時系列解析の基礎理論』(A5判・一六〇頁・三二〇〇円) 気象や地震、金融・株式から医学的な現象まで、時系列データ解析のための基礎理論。第一人者らによるビッグデータ時代の展望の書。

▼神里彩子・武藤香織編『医学・生命科学の研究倫理ハンドブック 第2版』(A5判・一九四頁・二四〇〇円) 医療応用をめざす生命科学の研究倫理ハンドブックとして好評を得た教科書をアップデート。最新の状況を反映。

東京電機大学出版局

▼井上雅裕編著『大学のデジタル変革—DXによる教育の未来』(A5判・二四二頁・三四一〇円) 教育におけるDXとは、データやデジタル技術を生かして、教育の変革を行なうこと。大学教育DXの全体像の俯瞰と先行モデルにおける今後の方向性について調査研究を実施。学習者本位のDXのあり方や国内外の動向、大学教育の将来と課題についてまとめた。大学等の高等教育機関や社会人教育関係者必読の書。

▼若山芳三郎著『学生のための情報リテラシー Office 2021・Microsoft 365 対応』(B5判・二〇八頁・二二四〇円) Microsoft Officeを活用して情報リテラシーを身につけるテキスト。基本的な文書作成・表計算・プレゼン資料の作成からデータベース、HTMLまで、重要な項目を精選して解説。実践的な例題を手順に沿って丁寧に解説。スマホ中心利用でパソコンが苦手な方に向け、キーボード入力の基礎やPCメールの使い方も解説。情報教育の教材や自学自習のテキストに最適。

法政大学出版局

▼澤田直・岩野卓司編『はじまりのバタイユ—贈与・共同体・アナキズム』(四六判・四一六頁・三〇八〇円) 文学、哲学、宗教学、経済、人類学など多領域に決定的な足跡を残した思想家への入門書。

▼HUU・ターマー著／斉藤寿雄訳『アードルフ・ヒトラー—ある独裁者の伝記』(四六判・三七〇頁・四一八〇円) その生涯を徹底した自己演出、部下を巧みに競わせる政治スタイルに着目し描く。

▼谷憲一著『服従と反抗のアーシユラー—現代イランの宗教儀礼をめぐる民族誌』(A5判・二二二頁・三六三〇円) 音楽やダンス、巡礼や自傷儀礼などイスラム統治下の両義的な生の現場に迫る。

▼神谷光信著『村松剛—保守派の昭和精神史』(四六判・五五六頁・四九五〇円) 東西冷戦期、議会制民主主義を尊ぶ保守派として活動した文芸評論家の生涯と作品を丹念に追う、初の本格評伝。

▼E・モラン著／杉村昌昭訳『知識・無知・ミステリー』(四六判・二二二頁・三三〇〇円) 知識が拡張されるほど、未知なる領域もまた発見される。〈百歳の哲学者〉モランによる科学哲学エッセイ。

武蔵野大学出版会

▼武蔵野大学教養教育部会編著『SDGsの基礎—みずから学ぶ世界の課題』(A4変型判・二二三頁・二二〇〇円) SDGsとは何か? 「SDGsの目指すもの」「SDGsを理解するための重要なトピック」SDGsと学問との関係—を解説したSDGsの教科書。



▼五味政信著『増補改訂版』五味版学習者用 ベトナム語辞典』(四六判・一二三六頁・九九〇〇円) ★項目数が約一・五倍に! (約八〇〇〇項目↓約一二〇〇〇項目) ★環境問題など現代の社会事情を考慮した掲載項目を選択! ★見出し項目の2倍を超える例文と句例!



武蔵野美術大学出版局

▼布施茂著『布施茂建築作品設計図面集』(A4判・二四〇頁・三八五〇円) 著者は住宅設計を中心に手がける建築家である。本書は、布施の「建築設計の思考と表現」を紹介する作品集として企画され、建築を学ぶ学生のために編まれた「教科書」である。

巻頭のカラード版につづき、発表年順にRC造一件、S/W造一六件については、アクセスメ、配置図、平面図、平面詳細図、断面詳細図、仕様等を掲載し、さらには開口部や階段の詳細図を写真図版とともに提示。教育現場で必要とされるディテールを収めている。

〈敷地〉のポテンシャル、〈外観〉による独自性、多様な距離感を創出する〈空間分節〉、シックエンスを構築する〈動線〉、空間にメリハリをつける〈スケール〉、空間をシャープに生成する〈プロポーション〉、〈素材〉同士の対峙、高い〈精度〉によるものの関係性……八つのキーワードから作品を読み解き、実践力を身につけるために編まれた本書は、武蔵野美術大学に着任して二〇年目を迎える著者ならではの視線によるものである。

明星大学出版部

▼樋口修資著『第3版 教育の制度と経営 15講』(A5判・二九八頁・二六四〇円) 本書は、主に教職を志す学生の利用を想定していますが、これら教職志望者にとどまらず教育に関心を寄せる一般の方々にも広く読んでいただけるよう、学校教育の制度・経営に関する仕組みの現状とその課題等に関する事柄を、15のテーマに分けて、できる限りコンパクトにわかりやすく紹介する内容となっています。



▼須藤康介著『教育問題の「常識」を問い直す―いじめ・不登校から家族・学歴まで 第2版』(四六判・二七六頁・一九八〇円) 本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどれが本当で、どれが誤解なのかを検討して行く。そして、本当としたらその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。

早稲田大学出版部

▼宮脇昇編著／浦部浩之・小泉直美・山上亜紗美・中川洋一・玉井良尚・大中原・山本武彦・稲葉千晴・小泉悠・玉井雅隆・足立研幾著『ウクライナ侵攻はなぜ起きたのか―国際政治学の視点から』(A5判・二八七頁・二五〇〇円) 世界を驚愕させたロシアによるウクライナ侵攻。気鋭の国際政治学者たちが侵攻の誘因を考察するとともに、いままさに進行中のこの事象について、その歴史的评价に果敢に挑む。

▼小田健太著『李賀詩論』(A5判・二六四頁・四〇〇〇円) 中国唐代の「鬼才」、詩人・李賀の表現者としての有り様を浮かび上がらせる。李賀の詩における詩語や詩句、およびモチーフに焦点を絞り、表現上の試行の独自性を、複層的な観点から明らかにする。李白・杜甫・韓愈・白居易といった詩人たちによる類型表現との比較を通して、それぞれの表現を通時的・共時的に読み深める。李賀は、どのように先行する表現を受容したのか、あるいはそれと対峙したのか。そして、李賀はいかにして表現者としての自己を自律的に語っていたのかを探る。

関東学院大学出版会

▼黒田泰介・亀井泰治著『軍港都市横須賀・下町地区の都市形成 防火建築帯によるまちづくり』(A5判・二四〇頁・三一九〇円) 幕末の製鉄所建設から始まる、軍港都市横須賀の都市形成。本書は戦後横須賀のまちづくりに焦点をあて、その中心市街地である「下町地区」を対象として読み解いていく。

〔目次〕第1章 軍港都市横須賀のなりたち／第2章 震災復興と下町地区のまちづくり／第3章 太平洋戦争前後の横須賀中心市街地／第4章 耐火建築促進法と全国の防火建築帯／第5章 下町地区の防火建築帯：三笠ビル／第6章 下町地区の防災建築街区：あずまビル／第7章 軍港都市横須賀のまちづくり



名古屋大学出版会

▼王寺賢太著『消え去る立法者―フランク・ス啓蒙における政治と歴史』(A5判・五三二頁・六九三〇円) かつてこんなふうに読まれたことがあっただろうか。モンテスキューとルソー、そしてデイドロへ。「啓蒙」をクリシエから解放放つ。

▼竹沢泰子著『アメリカの人種主義―カテゴリー／アイデンティティの形成と転換』(A5判・五一六頁・四九五〇円) 社会的につくられた人種は、なぜかくも絶大な影響力をもつか。第一人者による渾身の成果。

▼小俣ラポー日登美著『殉教の日本―近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』(A5判・六〇〇頁・九六八〇円) キリスト教文化にとって、日本は殉教の聖地だった。驚くべきイメーじはどのようにに成立・普及したのか。東西をつなぐ「双方向の歴史」を实践する。

▼坪井秀人著『戦後表現―Japanese Literature after 1945』(A5判・六一六頁・六九三〇円) アジア太平洋戦争からポスト三・一一まで、戦争をめぐる表現の重層性から〈戦後〉概念を再審にかける労作。

名古屋外国語大学出版会

▼亀山郁夫・エリス俊子編『世界文学の小宇宙3 詩集 愛、もしくは別れの夜に』(四六判・二六八頁・二八六〇円) 混沌の現在に贈る世界の傑作詩。英語圏(ブロンテ他)、フランス(シエニエ)、スペイン語圏(ロルカ他)、ドイツ(ハインヘ)、中国(古典「紅樓夢」他)、ロシア(マヤコフスキー他)、ブラジル(アルヴェス)、イディッシュ語(アンリスキ)、ラテン語(アルキポエタ)、アラビア語圏(ライラー他)、……日本(式子内親王、萩原朔太郎)。(二〇二三年三月刊行)



▼梅垣昌子著『フォークナー 語りの力―その創造性の起源へ』(A5判・定価未定) フォークナー研究の第一人者による論考。(八月末刊行予定)

▼根無一信著『はじめての比較宗教学 なぜ「今日」はツイているのか』(A5判・定価未定) 驚くほど身近にある宗教の本質について語る。(八月末刊行予定)

京都大学学術出版会

▼山敷庸亮編『有人宇宙学—宇宙移住のための3つのコアコンセプト』(A5判・三三〇頁・三一九〇円)二〇二二年にアルテミス号の打ち上げが成功し、月面社会実現への期待が高まる昨今だが、現実人類の宇宙居住を考えたとき、喫緊の課題は何だろうか。自然資本、技術、社会の三つのコア概念と研究の最先端を紹介する。

▼淵崎正弘・若林靖永監修／藤田哲雄著『ITと現代ビジネス—実践から学ぶ経営・実務・技術』(A5判・三四〇頁・三五二〇円)どうすれば専門知識がなくても「IT」を使えるのか?各企業がそれぞれの実例と実体験をもちより体系化。現場で悩めるビジネスマン、これから社会に出る大学生に贈る、ビジネスとITの基本リテラシー。

▼高木裕貴著『カントの道徳的人間学—性格と社交の倫理学』(A5判・四二〇頁・五二八〇円)定言命法に支えられた道徳形而上学は妥協を許さぬ厳格な理想を掲げるが、一方でカントにはより現実的な人間学があった。最晩年の人間味あふれる豊かな道徳哲学を描く。

大阪大学出版会

▼中内政貴・田中慎吾編『外交・安全保障政策から読む欧州統合』(A5判・四二二頁・六六〇〇円)欧州統合について、核兵器、エネルギー、人権外交といった外交・安全保障の政策から考察することで、負の側面をも照らし出す。

▼カミーユ・ゴルジュエ／ピエール・イヴ・ドンゼ／クロード・ハウザー著 鈴木光子訳『駐日スイス公使が見た第二次世界大戦 カミーユ・ゴルジュエの日記』(A5判・五八四頁・七七〇〇円)第二次世界大戦中に駐日スイス公使として日本に駐在したカミーユ・ゴルジュエが残した日記の全編日本語訳と解説。

▼西村高宏著『シリーズ臨床哲学6 震災に臨む 被災地での〈哲学対話〉の記録』(四六判・二六六頁・二七五〇円)震災を「語りなおす」とはどういうことか。ふさわしい「言葉」とは何か。「負い目」、「役に立たない」、「支援」、「ふるさと」、「被災した医療専門職者たちの戸惑い」といった観点から、震災という〈出来事〉をほぐす。

関西大学出版部

▼池田佳子他共著『ポスト・コロナ禍時代のグローバル人材育成—大学の国際教育のパラダイムシフト』(A5判・二〇六頁・三三〇〇円)コロナ禍の影響を受けて様変わりした国際教育、グローバル人材育成教育の取り組みを、関西大学における事例を中心に紹介する。ポスト・コロナ禍に向けて大学教育そのものの意義が問われる今、国際教育や人材育成に携わるもの全てにとって必読の書である。

▼蜷川順子著『祈りの形にみる西洋近世—茨木の銅版画シリーズ〈七秘跡と七美德がある主の祈りの七請願〉』(A5判上製・三八八頁・五六一〇円)近世初期に宣教師が日本にもたらした「主の祈り」の銅版画シリーズは、西欧社会の緊張と模索を伝えるものでもあった。本書はこのシリーズのイメージと、これを生み出した背景や伝統を徹底的に読み解く。



関西学院大学出版会

- ▼田中きく代・遠藤泰生・金澤周作・中野博文・肥後本芳男編著『海のグローバル・サーキュレーション―海民がつなぐ近代世界』（A5判・四四〇頁・四九五〇円）大西洋海域と他の海域はどのように接続されていたのか、諸海域は相互にいかなる影響を受けたのか。碩学の海洋史家による新しい世界史への提言。D・アーミティージ、M・レデイカーの論稿も収録。
- ▼ステイブンプ・オズボーン著／石原俊彦・松尾亮爾監訳『パブリック・サービス・ロジック―公共サービスの提供とサービス・マネジメント』（A5判・三四二頁・四七三〇円）公共経営と行政管理の研究者、学生、政策立案者、実務担当者に、新たな公共サービスの開発とイノベーションのための枠組みを提供。
- ▼朴賢淑著『成錫憲におけるシアル思想の成立と展開―聖書の立場から見た朝鮮の歴史を中心に』（A5判・三〇八頁・五五〇〇円）韓国のカンデイーと呼ばれ、民衆運動の指導者であり、ノーベル平和賞候補にもなった成錫憲のシアル思想について。

九州大学出版会

- ▼堀地明『清代北京の首都社会―食糧・火災・治安』（A5判・四一二頁・八五八〇円）頻発する水害や火災、食糧問題、盗賊の跋扈と外国軍の脅威―未曾有の内外危機に人々はいかに立ち向かったのか。檔案史料を多用し緻密に分析した、初の本格的北京史研究。
- ▼渡辺貴史・黒田曉編著『地域のレジリエンスを高める環境科学』（A5判・一九〇頁・二二〇〇円）環境変動のもたらす課題を受け止め、「逆境に強くある」社会をつくるために今何が必要なのか。未来を切り拓く環境科学を学べるテキスト。
- ▼大谷順子編著『子育ても、キャリア育ても―ウイズ／ポストコロナ時代の家族のかたち』（A5判・二三四頁・二二〇〇円）超少子高齢化の進む時代、国際開発キャリアの背景を持つ研究者たちから若い世代へ。どのように人生を切り開くかを示すメッセージ。



編集後記

- ▼小誌では、コロナ禍が大学の研究や教育に及ぼす影響を、さまざまな視角から四回にわたり特集として深掘りしてきた。「大学教育・研究の現在」コロナ禍における各国比較（「二三号」）／「変わる大学、変わる学び」新型コロナの衝撃（「二四号」）／「コロナ禍後の教科書」（「二九号」）／「コロナ禍における出版と文化」第三八回日本・韓国大学出版部協会合同セミナー（「三四号」）。未曾有の事態への正確な理解とその対処法を誰もが求めていた時期に、緊張感を漂わせつつ展開された論考ひとつひとつが、示唆に富むものでした。
- ▼社会が平常運転に戻った今春以降、大学に設けられていた制限が完全に解除され、コロナ禍以前の風景が広がっています。そこで改めて日本の大学に思いを巡らせるとき、以前からの根本的な課題がふたたび眼前に浮上し、私たちの前に突き付けられているように思います。
- ▼今回の特集では、ガバナンスや国際化をめぐる課題など、それらの幾つかを論じております。大学の現在と未来を見通す際のヒントとなりそうです。

- 大同印刷(株) 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
TEL 0952-71-8550 <https://www.daidou-jp.com>
- ダイニック(株) 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル
TEL 03-5402-1811 <https://www.dynic.co.jp>
- (株) 太平印刷社 〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16
TEL 03-3474-2821 <http://www.p-taihei.co.jp>
- (株) 太洋社 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
TEL 058-324-2111 <https://www.p-taiyosha.co.jp>
- (株) 竹尾 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
TEL 03-3292-3617 <https://www.takeo.co.jp>
- (株) 東京弘報社 〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1
TEL 03-3291-1771
- (株) とうこう・あい 〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F
TEL 03-5148-7200 <https://www.toko-ai.com>
- 東光整版印刷(株) 〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15
TEL 03-3632-0801
- (株) トーヨー企画 〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
TEL 075-411-8288 <https://www.talligent.jp>
- 図書印刷(株) 〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36
TEL 03-5843-9700 <https://www.tosho.co.jp>
- (株) 日新広告社 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F
TEL 03-3263-9431 <http://www.nissinkoukokusyua.com>
- (株) 日本経済新聞社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
TEL 03-6256-7528 <https://www.nikkei.co.jp>
- 日本宣伝販売(株) 〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278
TEL 048-620-1021 <http://www.nihon-senden.jp>
- (株) 博報堂 〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F
TEL 03-6441-6711 <https://www.hakuhodo.co.jp>
- 藤原印刷(株) 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5
TEL 03-3291-0191 <https://www.fujiwara-i.com>
- (株) 平文社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
TEL 03-3944-0301 <http://www.heibun.co.jp>
- (株) 毎日新聞社 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL 03-3212-3340 <https://www.mainichi.co.jp>
- 誠製本(株) 〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5
TEL 03-3967-3952 <http://www.makoto-seihon.com>
- (株) ミヤコシ 〒275-0016 千葉県習志野市津田沼1-13-5
TEL 047-493-3854 <https://miyakoshi.co.jp/>
- 名鉄局印刷(株) 〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23
TEL 052-561-3272 <http://www.meitetyoku.co.jp>
- (株) 遊文舎 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL 06-6304-9325 <http://www.yubun.co.jp>
- (株) 読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
TEL 03-3242-1111 <https://www.yomiuri.co.jp>

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

- (株) 朝日新聞社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 亜細亜印刷(株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株) アベル社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 東京三和ビル301
TEL 03-6256-8133 <https://www.abel-sha.com>
- 尼崎印刷(株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
TEL 06-6494-1122 <http://www.amain.co.jp>
- 英文校正エナゴ 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2波ビル4F クリムゾンインタラクティブジャパン
<https://www.enago.jp/>
- (株) A L E 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王子製紙(株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株) 加藤文明社印刷所 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城島印刷(株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株) 糸川印刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- 港北メディアサービス(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- (株) コングレゴロ・コミュニケーションズ 〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階
TEL 03-3510-3750 <https://www.congre-gc.co.jp>
- 三松堂(株) 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
TEL 03-6823-5360 <https://www.sanshodo.co.jp>
- 三美印刷(株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
TEL 03-3803-3131 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三立工芸(株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三和印刷(株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信濃印刷(株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株) 渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株) 眞興社 〒150-0033 東京都渋谷区猿樂町19-2
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新日本印刷(株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株) 精興社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikosha-p.co.jp>
- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766
TEL 075-255-2288 <https://www.soiei-pb.co.jp>
-

吉見俊哉論 — 社会学とメディア論の可能性

難波功士／野上元／周東美材 編

四六判上製 320頁 定価 4,950円 ISBN:978-4-409-24157-8

1980年代から今日におよぶ、吉見俊哉の膨大で多種多様な研究の核心と革新性はどこにあるのか、そして何を引き継ぎ発展させることができるのか。吉見に学び研究の前線に立つ精鋭たちが挑む初の試み。



「ものづくり」のジェンダー格差

— フェミナイズされた手仕事の言説をめぐって

山崎明子 著

四六判上製 286頁 定価 4,950円 ISBN:978-4-409-24156-1

手芸、内職、伝統工芸、千人針…。手仕事をめぐる言説に隠されたジェンダー構造を明らかにする画期的研究。



デミーンの自殺者たち

— 独ソ戦末期にドイツ北部の町で起きた悲劇

エマニュエル・ドローア著 剣持久木／藤森晶子訳 川喜田敦子解説

四六判上製 194頁 定価 3,080円 ISBN:978-4-409-51098-8

独ソ戦末期、ソ連兵の暴力をおそれ集団自殺を遂げたドイツの町があった。なぜ戦時暴力は起こったのか。語られなかった戦争の悲劇を丹念に追う。



医学と儒学 — 近世東アジアの医の交流

向静静 著

四六判上製 346頁 定価 5,720円 ISBN:978-4-409-04124-6

東アジアの国際情勢から様々な影響を受け、絶えず変容し続けていた近世日本の医学。後藤良山らが実践した「復古」の多様性を解き明かし、彼らを近代医学的評価から解放する、近世日本医学史を再定位する意欲作。



山井敏章 ユルゲン・コツカ著 ↑起源・拡大・現在 ↑2420	7刷 資本主義の歴史 — 起源・拡大・現在 ↑2420	井上太一 著 ↑批判的動物研究とは何か ↑4950	2刷 動物倫理の最前線 — 批判的動物研究とは何か ↑4950	篠原雅武 著 ↑思弁的実在論以後の「人間の条件」 ↑2530	3刷 人新世の哲学 — 思弁的実在論以後の「人間の条件」 ↑2530	高谷幸編著 ↑日本の現実から考える ↑2200	5刷 移民政策とは何か — 日本の現実から考える ↑2200	小山友介 著 ↑増補改訂版 ↑4400	2刷 日本デジタルゲーム産業史 — 増補改訂版 ↑4400	重版出来 じゅうはんしゅたい
---	--	---------------------------------	--	--------------------------------------	---	-------------------------------	---	---------------------------	--	--------------------------

●北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

●弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

●東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

●流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

●聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

●慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

●専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

●玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

●中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

●東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

●東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町5番
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

●法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

●武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

●武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

●明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-591-9254

●早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

●関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

●名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

●名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

●京都大学學術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

●大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

●関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

●関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

●九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160

●大阪経済法科大学出版部(休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

【発行所】

一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <https://www.ajup-net.com/>

【表紙デザイン】 奥定泰之

【表紙写真】

オックスフォード大学



*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます

大学出版 135号 (2023年夏)

2023年8月1日発行

頒価 100円 (千共)